

みやぎ復興つうしん

H25
1月号



「ガイドライン検討委員会」



「岩沼市玉浦西地区の着工見学会に集まつた方々」
(2012年12月1日)

発行

社会福祉法人 宮城県社会福祉協議会
宮城県災害・被災地社協等復興支援ボランティアセンター
〒980-0011
宮城県仙台市青葉区上杉1丁目2番3号 自治会館2F
TEL: 022-266-3952 FAX: 022-266-3953
URL: <http://msv3151.c-bosai.jp/>



新年のあいさつ

未曾有の東日本大震災から1年10ヶ月を経過して、新たな一年がスタートしました。この間、県内外及び県外からの御支援とご協力を受けて、被災地の復旧・復興が一歩ずつ進んでおりますが、まだ、復興の兆しが目に見えない状況となっております。

被災地の現状は、復興に向かた公共事業が着実に進んでおりますが進捗率が低く、また、被災者支援として、岩沼市玉浦西地区防災集団移転促進事業起工及び山元町新山下駅周辺地区第一期災害公営住宅が着工されておりますが、応急仮設住宅及びみなし仮設住宅の入居者が減少せず、供与期間が1年延長されております。

県社協では、被災地社協に復興支援員を派遣して、地域福祉の推進や災害ボランティアセンター等の運営を継続的に支援してお

ります。また、10月に「被災地の地域福祉活動指針（ガイドライン）検討委員会」を設置して、これまでの事業を振り返り、来るべき大規模災害に備えて、災害対応の仕組みや制度を再検討するとともに、次年度以降につながる事業提案をし、被災している方々に対して、自助・共助・公助を基本とした、適切な支援及びその仕組みづくりを、関係機関との協働により展開していくことにしております。

また、避難訓練等への住民参加率が低いなど、被災体験の風化が懸念されており、被災地だけの出来事にとどめずに、被災状況及び復興状況を広く伝えていくことが重要になっております。県社協として、HPや福祉みやぎで的確な情報を発信していきます。

気仙沼市社協 復興支援コーディネーター
齊藤 貴恵さん

「らしいことや悔しいこと、できないことはたくさんある。けれど、行き詰まつたらまずは相談。みんなと一緒に考えながら、少しずつ課題をクリアしています」。復興支援コーディネーター・齊藤貴恵さんは明るい笑顔で答えてくれた。

出身は地元気仙沼市。同市社協のホームヘルプサービス事業所に勤務し、在宅介護業務に携わっていた。発災から約1ヶ月後の4月末より同ボランティアセンターに異動となり、復興支援コーディネーターとして活動している。主な仕事は生活支援相談員のフォロー、マッチング業務だ。住宅訪問の調整を行い、ニーズを集め、必要であれば各支援機関につなぐことも復興支援コーディネーターの役割になっている。

「一番のやりがいは、住民の間に溶け込んでいると実感できた瞬間ですね。交流会やイベントの達成感とともに味わったり、相談員たちが住民の『生の声』を拾いあげてくれると、やはり嬉しく思います」。もちろん、そこに至るまでの道のりは容易ではない。「最初はかたくなつた人も、訪問を重ねることで徐々に打ち解けてくれます。ですが、さまざまな事情により相談員のフォローが難しい場合は、その人に合った別支援機関がフォローできるような仕組みを整えていきたいです」。人と人のつながりが途絶えないよう、齊藤さんはいつも心をくだいている。

これから先、どんな気仙沼市にしていきたいか。そしてともに働くセンタースタッフと、気仙沼の住民にメッセージをくれた。「目に見える復興は難しいですが、日々、ほんの少しでもいいから笑ってほしいです。それが芽となり花となるように、いつかたくさんの笑顔が咲く気仙沼になれたらいいと思います」。



『はまらいんや交流会』開催

昨日 年12月14日(金)仙台市福祉プラザにて『はまらいんや交流会』が開催された。気仙沼市社協・仙台市社協共催のサロンで、参加者は仙台市に避難している気仙沼市民約80名。それぞれの出身地区ごとにテーブルを囲み、ときに気仙沼市社協スタッフを交えながら近況報告や思い出話を咲かせた。会場の一角には情報コーナーが設置され、地区ごとの写真・復興市場ガイド・行政機関の情報などを展示。気仙沼市ボランティア連絡会からは手作りのお守りとメッセージカードが贈られた。参加者からは「昔なじみと再会できた」「久しぶりに気仙沼を感じた」と笑顔がこぼれた。「たくさんの方々のご支援、ご協力によって、ようやく開催にこぎつけることができました。感謝の気持ちでいっぱいです」。(気仙沼市社協ボランティアセンター所長・鈴木美紀さん)



被災地の取り組み みやぎ～絆～smile

塩釜市

3つの離島からなる浦戸諸島を抱える塩釜市。市内5ヶ所ある仮設住宅のうち、3ヶ所はそれぞれの離島に配置されている。入居者は約240人、みなしふ設も含めれば約500人にのぼる。昨年10月に『塩釜市災害ボランティアセンター』を閉所し、塩釜市社会福祉協議会内『塩釜市社協ボランティアセンター』へ移転した。それに伴い災害復旧ニーズも収束し、現在は仮設住宅の戸別訪問、イベント開催、健康相談など生活支援へと移行している。なかでもサロン活動はほぼ毎日予定が埋まるほどの賑わいを見せ、とくにカラオケ交流会が好評だ。どうしても物音を立てないよう窮屈な生活をせざるを得ない仮設住まいだからこそ、大声で歌える場はストレスの発散にもなり、楽しめるという。重要視しているのは民主委員やNPOなど各団体との連携だ。より地域に近い立場にいる

民生委員からの情報をもとに被災者のニーズをつかみ、すばやく的確な対応を目指している。

市内の様子もようやく落ち着きを取り戻した。被災した地域に継続して生活している世帯においても、修繕やリフォームなどにより比較的安定した暮らしを送っている。

その反面、将来への課題は尽きない。以前より問題視されていた人口流出による市全体の高齢化、地場産業の衰退が、震災を経てより深刻化した。仮設入居者の大半が高齢者であり、自立は困難になる。災害復興住宅の着工は今年秋を予定しているが、完成までは遠く、また完成したとしても入居可能世帯数が圧倒的に足りない。離島へ足を運べるのは月2回で、細かなフォローが行き届かない面もある。横たわる現実的な問題をどう乗り越えていくかが、復興への鍵となる。

これから先、どんな塩釜市にしていきたいか。同市社協地域福祉課の班目義則さんは語る。「活気を取り戻したい。震

災よりもっと以前の、港町として栄えていた頃の塩釜を取り戻して、ようやく復興できたと言えると思います。まだまだ先は長いですが、前向きな気持ちを忘れずに取り組んでいきたいです」。



塩釜市社協ボランティアセンター

塩釜市北浜 4-6-52

TEL:022-364-1213

名取市

「震災により名取を離れてしまった人が、また戻ってきたいと思えるような、魅力ある町をつくりたいです」。なとり復興支援センター『ひより』の中野国彦さんは、名取市の再生に向けた強い思いを語ってくれた。

一昨年9月に災害ボランティアセンターから復興支援センターへ移行し、現在は同市内に7ヶ所（雇用促進住宅含め8ヶ所）ある仮設住宅の被災住民と、自治会への支援をメインに活動している『ひより』。特徴的なのは、各仮設に9名の復興支援相談員が常駐していることだ。独居世帯を中心とした戸別訪問、情報提供、サロン活動などを通じて日々から住民とふれあうことで、仮設の「日常」がわかる。そのため変化があればすぐに察知し、いち早く対応ができるのだ。

仮設の入居者は現在約2,100人。去年夏頃から転居する人が増

え、仮設に残された人々は焦りやあきらめを抱えているという。発災後の混乱を乗り越え、ようやく当時を振り返る余裕ができたからこそ、ストレス障害に苦しめられる。「自立という言葉の捉え方がとても難しい。私たちは住民の自立に向けて、どこまでも寄り添っています。そのためには、やはり生き甲斐が大事。誰かから頼られている、必要とされているという実感を得られるような自立支援を目指しています」。良い影響を与えてくれるのが住民参加型のイベントだ。以前、修学旅行の一環で、他県から中学生が仮設に訪れたことがある。「住民からすれば孫のような年齢の子どもたちです。彼らと交流することで住民の表情も明るく変わっていき、前向きな意識が大事なのだと改めて感じました」。

取り組みのひとつとして、長期的に被災者を見守るボランティアセンター立ち上げの動きがある。地域ボランティアと被災者ボランティアのコミュニティをつくり、協働で自立を進めてゆく体制を整えることが、復興に向けた大きな目標となっている。

道のりは長く、被災者の進むスピードもひとりひとり異なる。自立への意識改革、柔軟な支援体制、超法規的救済の徹底、どれも欠けてはならない大事な要素だ。住民とともに歩み、町を復興させたいという意志がはっきりと感じられる、中山さんのお話だった。



なとり復興支援センターひより
名取市増田字柳田 80
TEL:022-383-3185

気仙沼市

津波による大規模な被害を受けた気仙沼市。同市社協ボランティアセンターでは現在、生活支援相談員と復興支援コーディネーターを配置し、個別支援と地域支援を行なっている。個別支援では応急仮設住宅・みなしふ設住宅への戸別訪問や相談が主だ。地域支援では住民同士が支えあえる環境づくりを目指し、ボランティアの協力を得てイベントや交流会に取り組んでいる。発災当初は外部ボランティアの支援が大きかったが、今では地元ボランティアや団体も活躍し始めている。既存・新設の団体と連携を取りながら、活動にあたる日々だ。また、今年度は市社協として地区懇談会の開催が予定されている。より多くの意見を聞き、気仙沼の将来を見据えていく方針だ。

93ヶ所に及ぶ仮設住宅では、住民の移動が出てきている。

住宅を再建し仮設から退居、または別の仮設への転居でコミュニティに変化が生じ、将来に不安を感じる人も少なくない。精神的、経済的、あるいは家族間の問題等で先が見えない人々に、相談員たちは寄り添う。その一方で、いずれは自分自身の足で進んでいくために自立を促す働きかけも重要であり、ひとりひとりに合った支援が求められている。

県境にある気仙沼市は、隣県の岩手県一関市に避難している被災者も多い。「一関市の行政、また社協の職員さんは、県を越えて支援していただいています。本当に感謝しています」とは所長の鈴木美紀さん。距離的な問題で通いにくい同市社協に代わり、近い場所からサポートしてくれる一関市の存在は、避難者にとっても心強い存在だという。また、昨年12月には仙台市に避難している方を対象とした『はまらいんや交流会』を仙台市社協と協同で開催。再会を喜びつつも気仙沼に帰りたいという声も多く、市外避難者が安心して

帰郷できるような体制を整えることも、今後の大きな課題となっている。

「たくさんの関係機関、団体に支えられながら私たちは活動しています。少しずつでもいい、気仙沼の復興に向けて一丸となって進んでいきたいです」。



気仙沼市社協ボランティアセンター
気仙沼市東新城 2-1-2
TEL:0226-22-0722

東日本大震災に伴う災害派遣等従事車両の取扱の期間延長（1月～3月）について

東日本大震災に伴い災害救助のための車両の取扱については、災害被害が甚大で今後も一部対応の必要性が残っているため、下記のとおり延長することになりました。

①適用期間（延長）

平成25年1月1日から平成25年3月31日まで

*東日本大震災に伴う災害派遣等従事車両の取扱は、今回延長の平成25年3月31日をもって終了することになりました。（証明書利用の場合は、平成25年3月31日24時までに高速道路から退出願います）

②変更点

・対象地域から石巻市が外れました。

・対象地域～塩釜市、気仙沼市、山元町、松島町、七ヶ浜町、南三陸町（沿岸6市町）

詳しくは、宮城県災害・被災地域社協等復興支援ボランティアセンターHPにて確認願います。

<http://msv3151.c-bosai.jp>



第8回 社協フォーラム 「新たにささえあいを求めて」 ～“みやぎ”の復興に向けて 今、社協が何をすべきか考える～

開催 平成25年2月4日(月)午前10時～午後3時15分まで
東京エレクトロンホール宮城(県民会館)601会議室他

今回のフォーラムでは、東日本大震災後の県内の地域福祉活動を推進していくための取り組み（小地域福祉活動）を、事例等を通じて検証（シンポジウム）し、地域で安全・安心に暮らすためにはどういった支え合いや助け合いが必要なのか、社会福祉協議会としての役割を確認し地域福祉活動の視点や方法について考えます。

お問い合わせはこちら

宮城県社会福祉協議会 地域福祉課
E-mail : g035@miyagi-sfk.net